

第16回 秋田県教育研究発表会資料

適応指導教室における
構成的グループ・エンカウターの導入

～ 一歩すすんだ集団づくりを目指して ～

平成14年2月7日

横手市平鹿郡不登校適応指導「南かがやき教室」
専任指導員 高橋 さゆり

1. はじめに

平成 13 年度、秋田県内には 10 ヶ所の適応指導教室が開設されている。南かがやき教室はその一つであり、横手市平鹿郡（一部、湯沢市雄勝郡内）の不登校の子どもが通級する適応指導教室である。平成 14 年 1 月 15 日現在（3 学期スタート時）本教室には 21 名（男子 12 名 / 女子 9 名、小学生 3 名 / 中学生 18 名）が在籍している。

本教室は、さまざまな要因により長期間学校を欠席している児童・生徒に対し、面接相談、体験入級、教科学習、体験学習などの援助を行うことで、自立心や社会性を育てることを目的としている。

「不登校」(文部科学省による定義)

「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）」

適応指導教室は、このような不登校の子どもたちが通級する教室である。つまり、不登校の子どもたちが一つの教室に「集団」でいるということを表す。

「不登校の子どもたちが一つの場所に複数いる」 - 。この文から、一体どのような児童・生徒像、あるいは集団を想像するだろうか。不登校の子どもが複数集まる適応指導教室とは一体どんなところであるのか、本研究に入る前に、本教室の雰囲気をも具体的に想像できるように、まずは南かがやき教室の雰囲気を紹介したい。

2. 教室の雰囲気

< 物的環境面 >

本教室は平鹿町の醍醐公民館内 2 階に設置されている。この公民館は、以前中学校だった建物であるため、子どもたちは環境的に非常に恵まれている。教室のほか、視聴覚室、調理室、グラウンド、体育館、時には他目的室（ミラーボール付の部屋）を貸してもらいながら、子どもたちは自分達の活動を楽しんでいる。

< 人的環境面 >

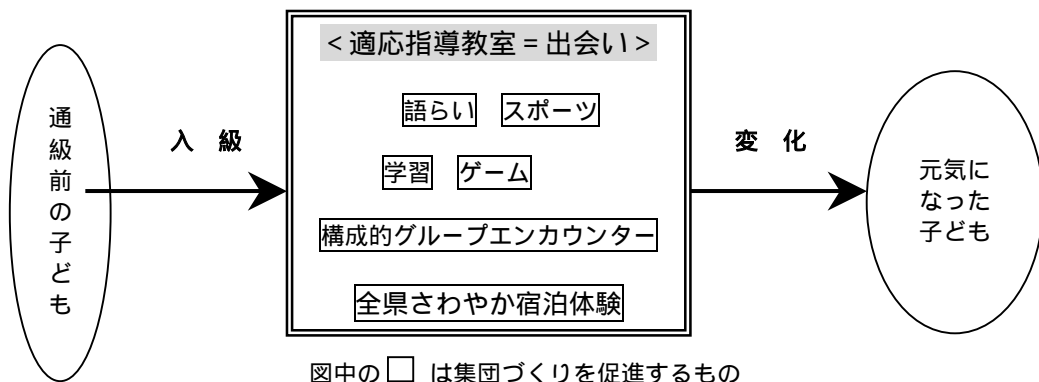
本教室の指導員は 2 名。その他、公民館の事務室の方や地元のグラウンドゴルフクラブの方々との交流もある。また大学生たちとの交流もあり、人との「出会い」にも恵まれた環境といえる。

このような環境のもと、子どもたちは毎日エネルギー溢れる活動を展開している。学年や性別にこだわらず交流することができる。特に火曜日と金曜日は、いつも以上に子どものエネルギーを感じる日といえる。教室は火曜日～金曜日に開かれているために、火曜日は教室にとって一週間の始まりである。「休日にあった出来事をとにかく伝えたい！」そんな思いの子どもがたくさんおり、教室の雰囲気はあっという間に明るくなる。また一週間の終わりを意味する金曜日も、活動エネルギーが高くなる。来週の火曜日まで会えない分の交流を楽しんでいるかのような印象を受ける。

子どもたちの活動の場は広く、それぞれの場所で自分たちの活動を繰り広げている。教室に限らず、いろんな場所で子どもたちの笑い転げるシーンを目にする事ができる。このような姿に、わが教室に初めて足を踏み入れた人々はまず驚いた表情を見せる。それは、一般的に想像する不登校の子どもたちとは全く異なる姿を展開しているからであろう。しかしこの姿は、入級当時の姿とは大きくことなった姿である。

個々の子どもの入級当時のことを思い起こしてみると、今日ある姿がいかに大きく成長した姿なのか、それははっとさせられるほどである。

例えば、初めてお母さんと来級した時は床に視線を送り、非常に暗いイメージを与え子どもがいた（当時中3）。しかし数ヶ月後、教室にいたのは教室を笑いのうずらに巻き込んでくれるほどのムードメーカーとしての彼女だった。彼女を大きく変えたのは、教室で彼女に関わった子どもたちや指導員との出会いであった（高校進学後、不登校当時の自分を振り返った作文に、その気持ちをはっきりと表現している）。よって「出会いの力」は非常に大きい。元来持っている力を発揮できずにいた子どもたちが、自分にとって「友だち」と思える人がたくさんいる「集団」と出会ったことで、大きくプラスの変化をしていったのである。「個は集団の中で育つ」といわれるが、教室の子どもたちの変化はこれを如実に表したものだといえるだろう。改めて集団の持つ力の大きさを考えさせられる。



図・通級前後の子どもの変化

図は、通級前後での子どもの変化をまとめたものである。適応指導教室は、友だちや指導員との「出会い」から始まる。そしてその集団の中でいるんな力を回復したり、自己成長を遂げていくものと考えられる。出会えたこの仲間集団を有効に用い、子どもたちの力を育てる関わり方はないだろうかと考えるとき、教師が使える「育てるカウンセリング」の一技法である「構成的グループエンカウンター」をとりあげることができるだろう。

3. 構成的グループエンカウンター (Structured Group Encounter = SGE)

構成的グループエンカウンター(以後、SGE と示す)とは、國分が 1970 半ばにわが国に紹介・普及した技法であり、SGE とは「ホンネとホンネのふれあいによる人間関係をグループを活用して体験する方法」である。これは「育てるカウンセリング」とも呼ばれる。

育てるカウンセリング (國分、1998)

不登校やいじめ、授業不成立などの問題が起こったときに、解決を援助するのが「治すカウンセリング」。いっぽう、こうした問題の発生を予防したり、子どもの適応や自己成長を援助したりするのが「育てるカウンセリング」である。それゆえ育てるカウンセリングとは、教師が日常的に使えるカウンセリングのことである。その最終目標は、自分で問題に対処する能力を育て、自分で問題を予防し、自分で自分を成長させていく能力を育てることにある。

集団の力をいい意味で用い、子どもたちの成長を支援できるということから、SGE が適応指導教室にもたらす効果は大きいと考えられる。よりよく個が育つために、教育的効果を持った集団づくりをより意識的に行うことが求められる。

4. 本研究の目的

小・中学生の不登校児童・生徒が通級する本教室では子どもたちが車座になって笑い合い、出会えた友人との交流を心から楽しみながら、エネルギーを与え合う活動を展開している。不登校の子どもにとって個別対応も当然求められる。だが適応指導教室という場を考えた場合、求められる機能は個別対応だけではない。不登校の子どもたちが複数集まる適応指導教室として、個別対応と同時に「集団の力」を生かす援助をすることも求められているのではないだろうか。

「集団が個を育てる」(國分ほか, 1998)という。子どもたちがよりよく成長できるように、よりよい集団づくりを考える必要がある。よって一歩すすんだ集団づくりを目指す上で、集団の力を有効に利用する技法「構成的グループエンカウンター」を用い、集団だからこそ育てられる自己成長について検討するものである。結果については、エクササイズを通して得られた子どもたちの言葉(シェアリングにあたる部分)、行動観察、アンケートによって検討していく。

1) 教室での実施エクササイズの内容

<これまで実施したエクササイズ>

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 10円玉リレー・ タコハゲーム・ こうもりと蛾・ トラストフォール・ ストレスマネジメント・ 別れの花束・ エゴグラム |
|---|

・ 新しく入級する子どもがいる際、リレーション(関係づくり)をねらいとしたエクササイズを主に行った。笑いあいながらエクササイズを行えることで、新しく入級する子どもも、迎え入れる側の子どもも心理的負担やストレスを軽減させた形で相手との距離を縮めることができるという効果がある。入りやすさを援助できる。

・ 新しく入級する子どもを受け入れる際の集団づくりなど、その場で必要だと感じられた場合に実施することが多かった。

普段行うSGEはリレーションづくりを目指すものが多い。今回実践例として「別れの花束」を取り上げたのは、本教室がどのような集団として育ったのかをとらえなおすことのできるエクササイズであると考えたからである。「一歩すすんだ集団づくり」がなされたのかどうか、次の実践例を通して考えていきたい。

2) 実践例

「別れの花束」(2001.3 実施)

【内容】

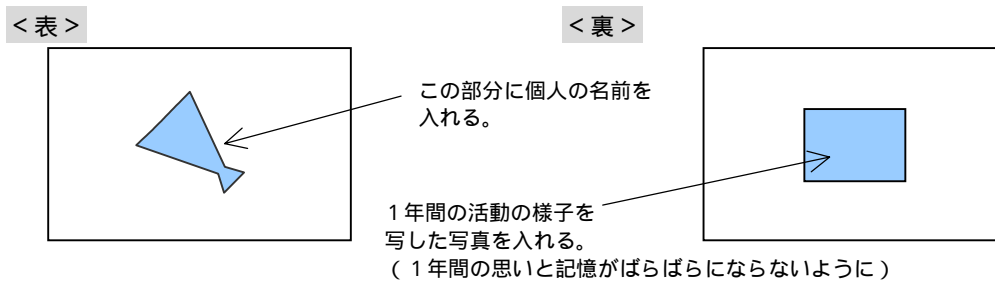
一年間のことを振り返り、友達が自分にしてくれた嬉しかったことや、友達に対して「すごいなあ」と思ったところなどを思い出し、感謝の気持ちや心温まるメッセージを贈るエクササイズである。

【ねらい】

- ・ みんなから送られたメッセージを読むことで、自己肯定感を高める(自己理解)。
- ・ 友だちのいいところを見つめなおし、友だちと出会えた喜びを再確認する(他者理解)。
- ・ 1年間の自分の歩みを振り返るきっかけにし、新年度に向かうために自分の気持ちの中にひとつの区切りをつける(高校進学、学校復帰を控えている子どものためにも)。

【準備物】

B5厚画用紙、ペン(カラフルなペンを様々準備 いろんな色で書かれたメッセージが花のような鮮やかさを出せるように)、色画用紙(中央の部分) のり



【進め方】

「今配った厚紙を色紙だと思ってください。中心に貼り付けられている色画用紙の部分に自分の名前を書きます。書き終わったら、一度テーブルの真中に集めましょう。」

エクササイズの趣旨を説明する。「みんなで1年間を振りかえって、うれしかったことやすごいなあと考えたことをこの色紙に書いてプレゼントしよう！」

例を示す。「例えば、～してくれてうれしかったよ！ありがとう！」とか、「～できるなんてすごいよね！私はびっくりしたよ！」

プレゼントするのは「温かいメッセージ」であることを確かめる。(文章化された言葉のもつ影響力は大きいので、相手を傷つけるようなメッセージはふさわしくないことを、一緒に再確認)

贈るメッセージは 具体的な方がよい、 相手がうれしくなる内容を書く、 なるべく多くのメッセージを書くことを伝える。

なかなか書けずに困っている子がいたら、「～の場面ではどうだった？」などと声をかける。

【子どもたちの反応】

行動・観察から

<エクササイズ中>

- ・(中1男子、S君)：「先生、これは3年生だけでなく、ぼくもみんなから(言葉を)もらえるの？」
- (私)：「もちろんS君ももらえるよ。これはみんなで『うれしかった気持ち』を交換しようとするものだよ。」
- (中1男子、S君)：「わかった」(ニッコリほほえむ)
- 自分もみんなからメッセージをもらえることを喜ぶ表情。
- ・ふざけた行動などは見られない。新しい世界へ巣立つ3年生や、4月に学校復帰を決意している子どもとの別れを深く感じている。むしろ普段ない静けさ。
- ・テーブルの上だけでなく、じゅうたんの上や廊下に出て、それぞれが思いを書いていく。

<エクササイズ後>

- ・友達が自分のために贈ってくれたメッセージのあたたかさをじわじわと感じている表情、恥ずかしいのだけれどくぎづけになってメッセージを見る姿、そこにはそれぞれが心の中で自分と向き合い、対話している様子が見てとれた。その後、自然に子どもたち同士でお互いに見せ合い、気持ちを語りあっていた。
- ・てれくさそうに見る男子。
- ・わいわいとお互いに見せあっている。

メッセージの中から

- ・ すごい読書家だよ！実は私も本が好きなので、今度おもしろそうな本があったら教えてね！
- ・ 料理でも編物でも、なんでもできちゃうY先輩は「プロ」です！すごい！
- ・ 好きだ！
- ・ いっぱいいっぱいありがとう！
- ・ これからもずっと友達だよ！
- ・ いつも教室を明るくしてくれてありがとう！お腹がいたくなるぐらいに楽しいよ！
- ・ マジでマジでマジでマジでマジでマジでマジでマジでマジでありがとう
- ・ ~のおかげで毎日楽しく教室に行くことができました！・・・など

受け取った後の子どもたちの声

- ・ すごく大事な宝物になった。部屋に飾っておく！
- ・ これ(このエクササイズ)すごくいい！
先日のこと。今年度に入ってからの入級者に「去年やったやつんだけどね、ジーンとくるいいのがあるんだよ。もう、とにかくいいんだって！」と説明、アピールしてくれている。
「先生、今年も3月にあれやるよね?!」(楽しみにしている表情)

6. 結果と考察

このエクササイズは、いつも自分を支えてくれた友だちの存在を改めて問い直すきっかけになった。心の中で誰かを思い、その気持ちを温かなメッセージに託す。そして自分のことを誰かが思い、温かなメッセージをプレゼントしてくれる。このような体験は、適応指導教室に通う子どもたちにとって、大変重要な意味を持つものと考えられる。非常に凝集性の高い集団が出来上がっていると感じさせられたエクササイズだった。エクササイズ中のあの真剣な表情、終えた後の子どもの反応や言葉は、SGEによって自己理解、他者理解、そして「みんな大事な人」という意識が生まれていること、そして一歩すすんだ集団づくりができたことを表すものとなった。

この事例以外でも、それぞれSGEを行ったときの子どもたちの反応から、適応指導教室でのSGEを導入する効果はありとされる。

適応指導教室に通級してくる子どもたちの多くは、「友だちとの人間関係をつくること、自分で決めて行動すること、自分の思いを言葉で伝えることに不安を感じ、そのことが学校という大きな集団の中に入っていけない原因にもなっていることがある」という(鳥取県教育委員会資料, 2001)。そのような子どもたちであるが、1年間の出席率を見ると、出席率100%という子どもも少なくない。「教室(適応指導教室)に行きたい!」と子どもに思わせる力は一体どこにあるのであろう。そこで子どもたちにとって、本教室(集団)や友人関係がどのような意味を持つ存在になっているのかを把握するために、アンケート調査を行った(資料 p9~14 参照)。

調査結果、「友だち」という存在が彼らを教室へひきつけていることが明らかになった。教室の中でつくりあげた友人関係の力である。アンケートには子どもたちの生の声があげられている。〈質問3〉では、なぜ本教室に来たいのかという「通級動機」について質問した。(図3、p11)その結果、8つの選択肢のうち上位3つは「友だちと会えるから」「一人で家にいるのはつまらないから」「元気になるから」というものであった。友だちとの交流がかなり魅力的であることを示すものとなった。適応指導教室に行ってみようと思いついたときから、子どもは誰かとの出会いを期待していると言えるのかもしれない。自分と同じ、不登校という状態の人たちが通う場所へ行ってみようという行動の裏には、他者とのつながりを求める気持ちがあるような気がしてならない。

在籍している子どもたちは、新たな友だちと出会えることを心から楽しみにしている。そして、温かく受け入れようとする気持ちが大変強い。それは、かつての自分の姿をそこに感じるからかもしれない。「緊張しながら教室のドアを開けたとき、教室のみんなが優しく迎え入れてくれた。とても嬉しかったなあ！」そのような嬉しい友だち体験を実際に積み重ねてきた結果であると考え。新しく入級した子どもが居づらくないように、大変心を配っている様子がこちらにも分かる。このように、彼らだけの力で新しい子どもを受け入れる体制をつくることは可能である。しかし、それをサポートする形でSGEを用いたいと考える。それは次の理由による。

迎え入れる子どもたちが「がんばらなければ！」という強い使命感のもと、いつも以上にハイテンションで迎え入れようと頑張ってしまう結果、自分が疲れてしまうということにつながりかねない。迎え入れる子どもも、新しく入級する子どももどちらもストレスが低減された状況の中で、かついい出会い体験、人間関係づくりをするためのリレーションが求められる。適応指導教室におけるSGEは、子どもたちの心理的ストレスの軽減という面や、すでにできあがった集団の中に入っていき際のスムーズな援助法にもなる。また、集団の中で「自分の存在価値」を正しくとらえることも出来、「友だちっていいな」という対人関係に対する回復もはかることができるこのような場面においても、SGEは非常に有効であるといえるだろう。

現在では大変に明るく、友達とのやりとりを心から楽しむ姿を見せる子どもでも、入級した当時と比較すると、よくこんなにプラスに変化し、成長してきたなあと感じずにはいられない。「人が多くて怖い」と涙声で電話をくれた子ども、また決して自分からは周りに声がかけれなかった子どもたちが、気がつく教室のムードメーカーになっていた。自分にとって意味のある集団の中で、子どもは大きく成長を見せる。この時期の子どもには友人の存在は非常に重要な意味をもつ。大事な人が自分に対して心からプラスの評価をしてくれる、そのことによる自己肯定感や自己受容は大きく伸びる。そして真の「出会い」をすることで、子どもたちは大きな変化を見せてくれるのである。子どもたちは「教室に来た頃の私は、すごくおとなしかったよなあ。今ではこんなになっただけ。」などと、自分を振り返っている。これは大きな成長とよべるのではないか。真の出会い体験がもたらすものの大きさをここでも感じさせられる。

子どもたちが笑顔で活動を展開している姿を見ると、友達に出会い、そして友達と共に過ごせる場を提供できる適応指導教室の存在の大きさを感じずにはいられない。アンケート回答にもあったように、子どもたちは友達との交流を何よりも楽しみにし、人と交流できる喜びを味わっている。適応指導教室は、同じような不登校の仲間に出会える場であり、そして人との交流のよさ、「友だちっていいな」という思いを回復できるチャンスになる。せっかくのこの「出会い」をさらに確かなものにしていくために、集団だからこそ育てられる力を見極め、援助していくことが求められているだろう。本教室では子どもたちはSGE実施のときに限らず、普段から相手を尊重したうえでの「ホンネとホンネの交流」を行っている。よって、いろんな効果はSGEだけの効果だということとはできない。しかし自己成長を促すたくさんの出来事が相絡まって、大きな効果をあげているのではないだろうか。この点から、適応指導教室におけるSGEの導入は意味あるものと考えられる。

教育の場面ではタイミングを逃さず関われる指導力が求められており、こうした力は子どもたちを伸ばす上で大きな鍵となると考えられる。SGE的な関わりが積み重ねられていくことの重要性を考えると、指導員や教師側に普段からどのような関わり方が望ましいのかが見えてくるように感じる。SGEをやったその時間だけが大事なのではない。それが「連続」して積み重ねられていくことが、本当に「集団」の中で子どもを育てていくことだと考える。SGEを実施しているときだけが集団づくりをすすめるチャンスなのでなく、毎日の、どの時間もSGE的に関わりを展開していくことが大事であると考え。

7. 今後の目標

今後も SGE 実施場面だけでなく、毎日が SGE 的関わりの連続になるように配慮していきたい。教室で過ごす普段の時間も、真の人間的なふれあい体験の連続の場になればと願っている。そして今後は、自分自身を考えるエクササイズも取り入れていきたいと思う

不登校児童生徒への対応として、「単に再度学校に通える状況になればそれでよいというわけではなく、登校拒否という状況を克服する過程で児童生徒自身がどのような力を見に付け、いかに成長したか」が重要であるとしている（92年3月、「登校拒否（不登校）問題について - 児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して」）。これは本適応指導教室でも常に意識している部分である。中学校卒業の時期を教室で迎えた子どもたちを思いおこしてみる。義務教育期間中に学校に戻ることはできなかったけれども、その後のこの子どもたちの活躍や笑顔はものすごく輝いている。「今、学校では毎日楽しくやっています！」という便りをもたらした。短いスパンでの復帰を目指すのではなく、真の生きる力に満ち溢れた子どもの育ちを援助していきたい。

【 引用・参考文献 】

- ・秋田県総合教育センター 2000 「タイプや状態に応じた不登校児童生徒への対応」
秋田県総合教育センター研究紀要第30集4分冊の4
- ・蘭千壽、古城和敬 1996 「対人行動学研究シリーズ2 教師と教育集団の心理」
誠信書房
- ・平木典子 2000 「思いやりを育む」 金子書房（『児童心理 6月号』特集 いま、思いやりを学ぶ）
- ・國分康孝ほか 1998 「学級担任のための育てるカウンセリング全書8 育てるカウンセリングが学級を変える（小学校編）」 図書文化
- ・國分康孝 2001 「エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 Part2」
図書文化
- ・近藤邦夫 1994 「教師と子どもの関係づくり - 学校の臨床心理学」 東京大学出版会
- ・松原達哉編 2001 「不登校・ひきこもり指導の手引き」 教育開発研究所
（教職研修 スクールカウンセリングの実践技術 No.2 7月増刊号）
- ・松原達哉編 2001 「教師のためのカウンセリング技術」 教育開発研究所
（教職研修 スクールカウンセリングの実践技術 No.1 5月増刊号）
- ・諸富祥彦 1999 「学校現場で使えるカウンセリング・テクニック - 育てるカウンセリング編・11の法則」 誠信書房
- ・諸富祥彦 1999 「学校現場で使えるカウンセリング・テクニック - 問題解決編・10の法則」 誠信書房
- ・永井徹 1996 「思春期の`こころのSOS 2 不登校の心理 - カウンセラーの立場から - 」 サイエンス社
- ・生徒指導だより No.208 秋田県総合教育センター
- ・高野清純他 1998 「教師・教師志望者のためのカウンセリング - 心の健康を保つために - 」 ブレーン出版
 - ・鳥取県教育委員会 2001 『あした、また学校で』

アンケート

南かがやき教室に通い始めてからのみなさんの気持ちや感じていることを教えてください。自分の気持ちに一番近いものはどれですか？その番号をまるで囲んでください。

はじめにあなたのことを教えてください。

<学年> 小4 小6 中1 中2 中3
<性別> 男 女

1. 南かがやき教室は自分にとって大事な場所だ。

とてもそう思う だいたいそう思う どちらともいえない ほとんどそう思わない
全然そう思わない

2. 南かがやき教室に通うことが楽しい。

とてもそう思う だいたいそう思う どちらともいえない ほとんどそう思わない
全然そう思わない

3. 行きたいなぁと思う理由はどれですか？気持ちの強い順に3つ選んでください。

友達と会えるから 勉強ができるから 1人で家にいるのはつまらないから
自分の居場所だと思えるから 仕方ないから行く 気持ちが落ち着くから
元気になれるから その他()

1番() 2番() 3番()

4. 1) 学校に行けず家にいたときの気持ちと、教室に通うようになってからの気持ちに変化がありますか。変化の大きさを5段階で表すとどれにあてはまりますか？

5 4 3 2 1

2) その変化は

プラスの変化である

マイナスの変化である

3) 南かがやき教室に通うようになってから、あなたの気持ちはどのように変化しましたか？文章にして教えてください。

[]

5. 教室には自分にとって大事だと思える友達がいる。

はい

いいえ

6. 教室の友達と出会えてよかったなぁと思うことがある。

非常によくある よく思う どちらともいえない ほとんどそう思わない
全然そう思わない

7 . 自分が休むと心配してくれたり、さみしがったりする友達がいると思う。

とてもそう思う だいたいそう思う どちらともいえない ほとんどそう思わない
全然そう思わない

8 . 1)教室に通う前のことを思い出してください。その時と比べ今のあなたは、「友達とかかわる」(例：話をしたり、一緒に遊ぶなど)時の気持ちや行動は変化しましたか？
変化の大きさを5段階で表すとどれにあてはまりますか？

5 4 3 2 1

2)その変化は

プラスの変化である

マイナスの変化である

9 . 友達や先生と関わることのできる活動は楽しい。

とてもそう思う だいたいそう思う どちらともいえない ほとんどそう思わない
全然そう思わない

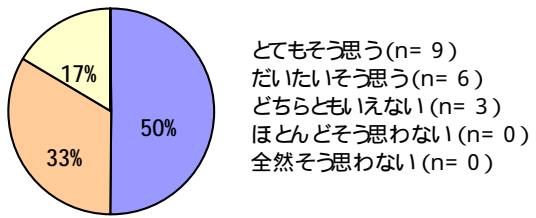
10 . 友達や先生とのかかわりの中で、「うれしかったなぁ」と感じた体験はどんなことでしたか？

文章にして教えてください。

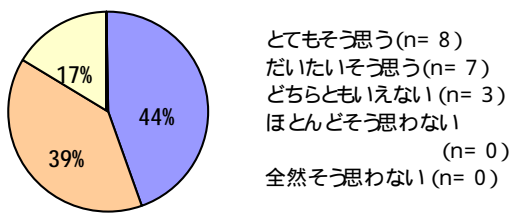
[]

いっぱい考えて、最後まで書いてくれてありがとう！

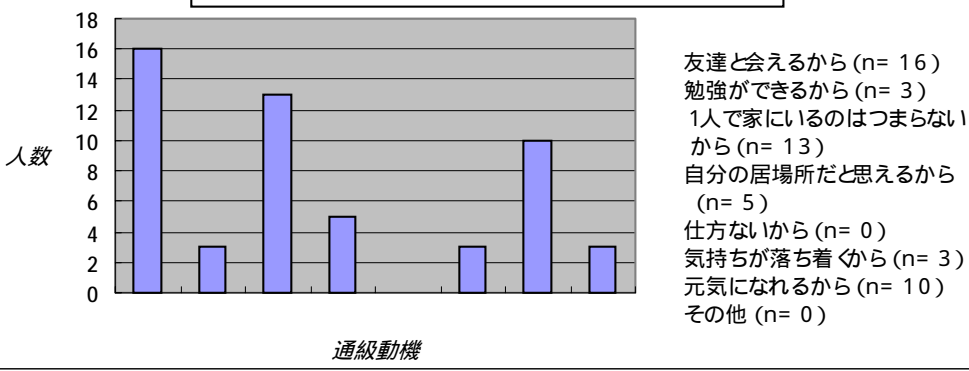
<図 1>質問 1:南かがやき教室は自分にとって大事な場所である (n= 18)



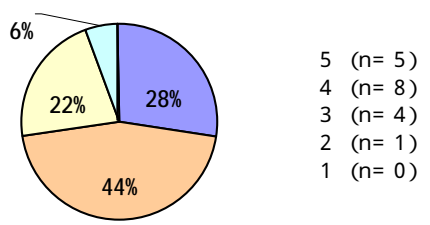
<図 2>質問 2:南かがやき教室に通うことが楽しい (n= 18)



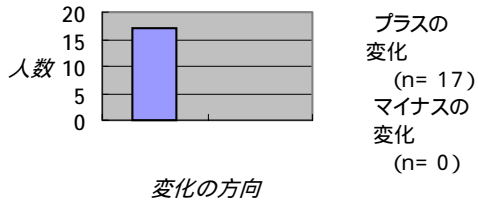
<図 3>質問 3:通級動機 (8つの選択肢より3つ選択) (n= 18)



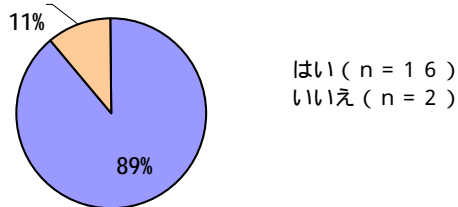
<図 4 - 1>質問 4 - 1:通級前後の気持ちの変化 (変化の大きさを5段階で回答) (n= 18)



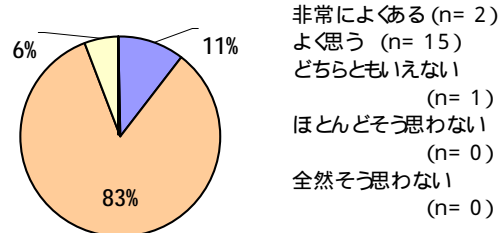
<図 4 - 2>質問 4 - 2:気持ちの変化の方向
(n= 17)



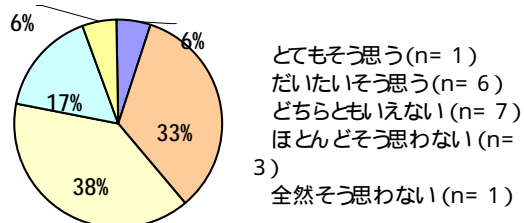
<図 5>質問 5:南かがやき教室には大事だと
思える友達がいる (n= 18)

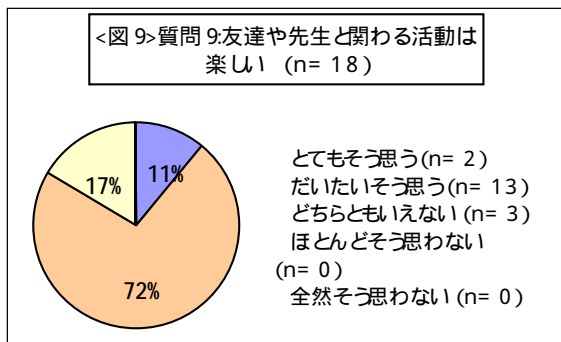
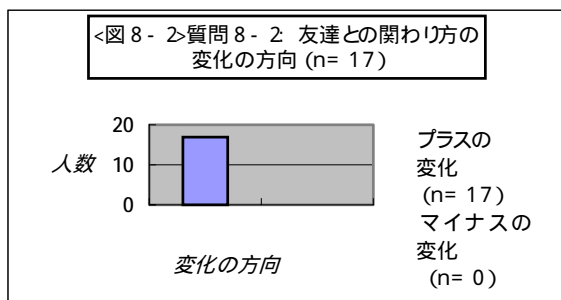
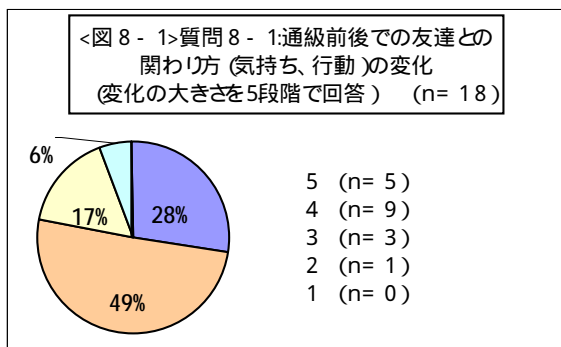


<図 6>質問 6:教室の友達と出会えてよかったと
思うことがある (n= 18)



<図 7>質問 7:自分が休むと心配してくれたり
さみしがったりする友達がいると思う
(n= 18)





**<質問 4 - 3 >南かがやき教室に通うようになってから、あなたの気持ちはどのように変化しましたか？
(子どもの言葉をそのまま掲載してある)**

- ・ キレにくくなった。
- ・ 自分から話しに行くようになった。
- ・ 明るくなりました。(3名)
- ・ 最初のころははずかしかったけど、今は慣れた。
- ・ みんながやさしいから自分までやさしくなれた。友だちと話すことがもっと楽しくなった。
- ・ プラス思考になった。
- ・ 前向きになって前より笑うようになった。友だちには気軽に話しかけるようになった。
- ・ 前向きになった。
- ・ 外向的になった。
- ・ 笑顔がもどった。元気になった。

**<質問 10> 友だちや先生との関わりの中で、「うれしかったなあ」と感じた体験はどんなことでしたか？
(子どもの言葉をそのまま掲載)**

- ・ 南かがやき祭や宿泊体験などです。
- ・ ウノで勝ったとき。
- ・ 友達と一緒にバカをしてくれたとき。
- ・ 宿泊体験などです。
- ・ 先生達にほめられたこと。
- ・ 友達とスポーツしたとき。
- ・ 友達：みんなと仲良く盛り上がった時とか、こういう友達がいてよかったなとうれしさを感じた。
先生：相談とかのっってもらってすごいやされる。こういうところに来てうれしさを感じた。
- ・ いろんな人と仲良くなれたこと。
- ・ 宿泊体験などでもいろんな人と関わりあえたのが良かったです。日々の生活が楽しいから最高です。
- ・ 宿泊体験で多くの友達と会えたこと。
- ・ 頼りにしてきてくれたこと。
- ・ 音楽を聴いたり、おしゃべりをしたとき。
- ・ 友達と仲良くなったこと。自分の気持ちを聞いてもらえたこと。